喜屋武岬はもう南のはてだから　そこから逃げるとしたら　ガケをおりるしかない　ほんとうに最後のところですよ

海岸のすぐ上の崖の岩の下に兵隊も避難民も小人数ずつかたまってかくれていました。そこに一週間ぐらいいましたがその頃水くみに行くときもいちばん怖かったのは友軍の兵隊でしたよ。子どもが泣くと兵隊がやってきて子どもを殺しやしないかとたいへんこわかったですよ。兵隊に殺された話も聞いていましたから、友軍の兵隊は食べ物がなくなると、銃剣をもってきて避難民に食糧を要求して、あんたたちは戦争のジャマだから殺してしまえという命令が出ているんだぞ、とおどしたりしていました。こっちもコメはのこり少ないし兵隊は海岸の岩のあいだにいっぱいいましたからね、少しずつしかあげなかったけど。

わたしたちの壕にいた兵隊は、自分はいつも奥のほうにいて、わたしひとりが水汲みでした

おそらく、敵は喜屋武岬の岩壁に日本軍の残りがいるということを知っていたでしょうどんどん艦砲射撃をして兵隊や避難民の死体があっちこっちにたくさんころがっていましたよ。死体はじきに腐って、銀バエがたかり、ウジがわいてきました。

わたしたちがそこに来てから十日ぐらいたつと、アメリカの軍艦から拡声機で、沖縄のみなさん、命がおしかったら助けてあげます、早く手をあげて出てきなさい、と言っていました。

わたしが、水をいれたナベを頭にのせ、妹はあき家から板ぎれをとって、二人で壕にむかってかえるとちゅう海のほうから大きな声がきこえてきたんです。命がおしかったら井戸ばたまで出てきなさい。あなたの息子が歩いているのもこっちからよく見えます。井戸ばたまで出なさい。沖縄の人たちはたいへんかわいそうです……。

わたしたちはびっくりしました。もう逃げもかくれもできない。軍艦からは何もかも見えている。わたしたちはあきらめた気もちで壕から出て、海岸の波うちぎわに立っていました。

その時、近くの岩かげのまえに十五、六人の兵隊たちが壕からぞろぞろ出てきて、集まっていました。捕虜になるつもりかと思ったら、斬込隊だったんです。隊長らしい人が訓示していました。

最後の斬り込み□今日は六月十九日だ。銃のない者は竹ヤリで、竹ヤリのないものは石ででも、何か武器になるものを持って、かならず一人で十人は殺すように、と言っていました。兵隊たちは散りぢりばらばらになって崖を登っていきましたよ。

崖の上のほうから、パンパン、小銃をうつ音がきこえ見えるところで、兵隊の何人かがたおれていきましたよ。

【「平和への証言」（沖縄県生活福祉部援護課）所収】

死のサイパン島で
― 一家全滅、私一人生き残った ―

小　浜　雪　子

戦い始まる朝

明け方、突然響いてきたゴーッという不気味な音に、私は目が覚めた。まるで地獄の底から聞こえてくるような音だった。子供心にも不吉な予感があり、飛び起きて窓を開け、音のする方向を見た。何も見えない。あたりは薄暗く、島の人々は、まだ眠りから覚めていなかった。私は両親を起こした。寝ぼけていた父が仰天し、何やら大声で喚きながらすっとんで家を出ていった。母は、妹や弟を起こし、右往左往しながら袋の中にいろいろな物をつっこんでいた。「お母さん、どこへいくの」と聞くと、母は「戦争よ、早く頭巾をかぶって」と、ふるえ声で言った。私は日ごろ学校で教えられ、心構えができていたので避難に必要なものをそろえて父の帰りを待った。

昭和十九年六月、平和でのどかだったサイパン島に、あの恐ろしい戦争が始まった。両親は、私が生まれたバナデルで農業をしていたが、近くに日本軍の飛行場があり、戦争が間近に迫ったため軍命令でカナベラへ移された。そこで家を新築して間もなく、この日の朝を迎えたのだった。

そのとき私は八歳。陥落までわずかの間に父仲本兼睦（三十歳）、身重だった母カミ（二十九歳）、妹美代子（六歳）、弟ケンジ（３歳）の、家族のすべてを失い、たった一人生き残った。

壕へ、壕へ

父の帰りを待つうちに、あたりは白々と明けてきた。いつもなら静かで幸せな夜明けを迎えたはずのサイパン島は、地獄のようなどよめきの朝に一変した。家々からは、数キロ離れた自然壕を求めて人が集まり、道は川の流れのように人間であふれた。地の底から聞こえてくるような、あの不気味な音は、Ｂ29機の襲来だった。空を埋めつくすかのように、一列横隊でチカチカ光を発しながらゆうゆうと向かってきた。

父が帰ってきた。弟を抱き、大きな袋を持って先に走った。続いて母が妹の手をしっかり握り、片手に荷物を持って私に気を配りながら走った。途中で雨のように爆弾が降ってきた。悲鳴をあげながら左右に倒れる人、人。夢中で走り、人々がひしめきあう壕へ逃げ込んだ。

壕では、負傷してうなる声、家族を失い胸をえぐるような声で泣く者、その異様な雰囲気は忘れることができません。数日間、この壕ですごした。食糧は、父が夜中に家まで取りに行っていた。　このころ、強烈なショックを受けたのは、負傷して泣き声で助けを求める十五、六歳の少年のことだった。少年は「神さま、助けて下さい。僕の腕が腐ってきた。ウジがわいてるよー。こわいよー」と、泣き叫んでいた。

真夜中の逃避行

どのくらい時がたったか知らない。戦いは、日ましに激しくなり、私たち家族は、いつの間にか日没と共に行動するようになっていた。食べるものといえば、生米や生の大豆を一粒、二粒ずつ、あとは味噌をなめたり、母がかじってやわらかくしたわずかなカツオ節。飲み水はなく、父が壕の近くから朝露のついた木の葉をとってきて私たちになめさせた。

こんな状態で毎夜歩き続けなければならず、たまったものではなかった。

シューパッ、と照明弾が夜空に上がり、ピュードッカーンと前後左右に弾が落ちてくる。照明弾が上がるたびに、弾が飛んでくるたびに伏しては起き、起きては伏せるの繰り返しが続き、まるで夢遊病者のように走り続けた。今考えると、へたばらずによく大人について行けたものだとわれながら感心せずにはおれない。

日本兵が幼児を殺す

こうしてたどりつく壕には、必ず日本兵がひそんでいて、小さい子どもたちが「おぶう」「おみずー」と泣くと、その家族にキラリと光る剣を突きつけ「出ていくか。でなければ子どもを殺せ」と脅していた。私の弟も泣いて両親が脅されたことがあった。父は「夜になったら外へ出るからがまんしてくれ」と必死に頼み込み、弟の口を手でふさいで難を逃れた。妹や弟は、両親のおしっこも飲んだ。私は海水も飲んだ。それほど戦火は激しく、兵隊たちは皆、気が立っていた。

そんなある日、私はとうとう日本兵が幼い子どもを殺すところを見てしまった。剣を突きつけられ、決断を迫られるあの親、この家族。それを見ていたとき、私は母に突然大きな布のようなものを頭からかぶせられた。そのとたんに、ほとばしるような、いいえ胸をえぐるような叫び声が私の耳に飛び込んだ。

日本兵が三人の子どもたちを剣で突き殺したのだ。私は全身の血が逆上し、

「兵隊さんの鬼！」

「馬鹿！」

「地獄へ行け！」

と騒ぎ、大きな声で泣き出した。あの時の母の驚き、あわてようは、今でも忘れられない。日本兵は、私の前まで寄ってきて、

「自分たちが悪いのではない。戦争が悪いのだ。親が殺せと言うからやったのだ」

と言った。長い戦争の疲れから、生きる気力と勇気を失った親の同意によって、尊い命を剣にかけられ死んだ子どもたち。とうてい忘れることのできぬ場面を私は見てしまったのだった。

それから数分後、幾組かの家族が泣きながら壕を出て行った。そのあと何が起ったのか、私はわからなかった。

しばらくして男の人が大声をあげて泣きながら壕に戻ってきた。その人の話を聞いて、何の罪もない大勢の人が海に無理やり身を投げさせられたことを知った。その人は、泳げたばかりに死ぬことができず戻ってきたのでしょう。真昼のできごとだった。

爆死した城間のおばさん

激戦が何日続いたことか、緑豊かなサイパン島は、みるみる島中が焼け野原と化し、見るかげもなく変り果てていった。月夜のときは、死体をピョンピョン飛び越え、避けて通ったが、暗闇のときは足で踏みつけギョッとなったものだった。思わず飛び上がり、雑草に足をふきふき、後をふりかえって「ごめんなさい」「お許し下さい」と両手を合わせて

走り去った。

またこんな悲しいこともあった。両親ととても親しくしていたぐすくま（城間？）のおじさん（人夫だったとしか覚えていない）の家族と一緒に山の中を逃げている時のこと、そこの奥さんが飛んできた砲弾の真っ赤な破片を避けることができず、悲惨な姿で亡くなってしまった。苦しい避難生活を私たち家族と共にしてきたおじさんは、すっかり生きる気力をなくし、死を覚悟したようすで幼い二人の女の子を前後にかかえ、泣く泣く私たちと別れていった。

戦い終わる日

逃避行は続いた。そんなある日、突然島中が不気味なほど静まり返った。何が起きたのかと、息を殺し外のようすに聞き耳をたてていると、あちこちの壕から、ただならぬ泣き声、いや悲痛な声とでもいうのだろうか、それが輪となり、波となり島中をおおうように押し寄せてきた。気がつくと、父も母も、そして兵隊たちも、壕にしがみつくように、ある者は岩に頭をぶっつけながら大声をあげて泣いていた。

日本軍兵の集団自決が始まった。それぞれに座り心地のよい場所を選び、腹の底から自分の祖国に向かって、いや故郷に、わが家へ向かって「おっかさーん」「おふくろさーん」と、力の限り叫んで、若い命を次々散らせていった。サィパン島の戦争が終わった日のことである。

家族の集団自決

それでも私たちの戦争は終わらなかった。次から次へと壕を変え、あてどなく山中をさまよい続けた。毎夜走り続け、親しい友や知人を失って、両親は身も心もずたずたに疲れきったようすだった。ことに母は身重、どうなるかわからない。両親は、何度も私に、

「もう死のうね、一緒に死のうね」

と言った。でも私は絶対に死ぬのがいやだった。

「次郎叔父さん（父の弟、当時テニアン在）のところへ行く。死ぬのはいや」

泣いて逃げ回った。

海岸にある小さな壕でのことだった。浜から五、六メートルほどよじのぼって入った壕は、四、五十人くらいの人がぎっしりと身を寄せあっていた。そこで私は、母に無理やり寝かされた。どれだけ時間がたったのかわからない。「ごめんなさい、許して－」と、母が私の体を揺すった。そのとき、すさまじい爆音とともに私は気を失った。

私一人生き残った

気がついたとき、壕内は、血と肉でごったがえしていた。あれだけの人が、二重、三重に輪をつくり、折り重なるようにして倒れていた。私はなぜか壕のなかをぐるぐる走り回っていた。自分は気が狂ったと思っていた。

いきなり私の右足首をつかむ者がいた。ギョッとして下を見ると大きな手だった。皮ふ

が黒こげして血にまみれていた。思わずふりはらおうとした。その人の顔が見えた。なんと父だった。入り口に足を向け、変り果てて倒れている父。私はワッと泣きくずれた。周囲を見ると、人の手が、足が顔がちぎれとんでいた。怖かった。一刻も早く、そこを出たかった。

「お父さん、起きて、早く」父の体をおこそうとしたが動かなかった。父は体中の涙をこぼし、ただ泣いていた。母や妹、弟は静かに眠るように横たわっていた。妹が「おねえちゃん」と、力ない声で私を呼んだ。もう一度呼んだ。駆け寄ろうとしたが、体が動かなかった。二人の兵隊が、自分の腸を引きずりながら、私に近づこうと必死になっていたからだった。

妹の声は、それっきり聞くことができなかった。目の前で冷たくなっている母。優しく、大好きだった母にさえ一言もかけられなかった。仲良しだった妹に呼ばれても返事さえできず、幼い弟の小さな手さえ握ってやれなかった。

父は、そんな私の手をしつかり握って言った。

「お父さんを許してくれ、こんなはずではなかった」

最後の力をふりしぼっているようであった。

「強い心をもつ、勇気のある子になってくれ。これからは天国でお父さん、お母さん、みんなで神さまになって見守っているから、ひとりだといって泣いてはいけない。さびしいときは、一番大きい星を見つけ、お父さん、と呼びなさい。必ず返事をするから……。知念のおじさんをさがしかわいがってもらうように……。幸せになってくれ……」とも言った。私は「ゆきちゃんも死ぬ」と父に泣きすがった。

そのとき、壕の外で聞きなれぬ言葉を耳にした。アメリカ兵のようだった。そのことを父に話すと、そのとたん、父は何を思ったのか「天皇陛下バンザイ」と、大きな声で叫んで、それきり動かなくなった。

あっけにとられていると、奥の方で物音がし、一人の日本兵が出てきた。「私も連れていって」と頼んだが、日本兵は「私は生きて帰らなければいけない。危険だから許して下さい、お元気で」と言い残し、去っていった。負傷したさきほどの日本兵が、近くで苦しんでいた。手榴弾を私にさし出し「それを岩にこすって自分に投げてくれ」と頼んでいた。しかし私はそれどころではなかった。

米兵に捕わる

入口に人の気配がしたので、見ると電柱が立っているのかと思われるほど高いアメリカ兵が二人、私を見ていた。私はあわてて父の横で死んだふりをし、目を閉じていた。ガタガタふるえていると、ズドン、と二発鳴った。苦しんでいる日本兵を殺したようだった。あまりの恐しさに歯がカチカチ鳴った。足音が近づき、私に何やら話しかけてきた。私は冷たくなった父の腕にしがみつき動かなかった。トン、トンと肩をたたかれても目を閉じがんばった。

耳元で水がこぼれる音がした。私は思わずとび起きた。思えば、あれはいつだっただろう。水だと言って父に海水を飲まされ、夜通し吐いたのは。なめるだけでもいい。水が欲しい、そう思った。二人は、水筒の水をニコニコしながら交互に、おいしそうに飲んで見

せ私の恐怖感をほぐすのにけんめいだった。私はもうがまんができなかった。
「お水を下さい」と水筒に手を出した。一気に飲もうとすると妙な臭いがした。疑い深い私は、カルキを毒だと感違いし「ウソつき」と、水筒を米兵に投げつけた。

二人は両手を広げて困った表情をしてみせた。次は、子どもなら誰でもとびつきそうな色とりどりのあめ玉、口に入れておいしい、というジェスチュアをしたが、私が受けとろうとしないので今度はガムを出した。無理に食べさせようとしたが、私が口を開かないので、二人は顔を見合わせ、いきなり私の左右の腕をわしづかみにして壕の入口までつまみ出した。私が「お父さん助けて！」「お母さん」と手をばたつかせるのもかまわず、下の浜まで連れていった。そして身につけていたボロボロで血だらけの服を脱がされ、海に入れられた。私はあまりの痛さに気を失った。

気がついたとき、私は車に乗せられ、裸のまま米兵のひざの上で横になっていた。体中のあちこちが痛く、左足首をみると、皮が、肉がなく、米兵にもた＜さんの血がついていた。その後覚えているのは、赤十字の旗がひるがえるテントの中で傷の手当を受け、痛さで大声上げて泣いていたことである。

父の友人と再会、引き揚げ

それからダブダブの大きな服を着けさせられ、大きな車で収容所へ連れていかれた。車は捕虜でいっぱいで、男も女も大声で泣いていた。その途中、なつかしいバナデルの部落がみえた。米兵に「私の家はここよ、おろして」と頼んだが、おろしてくれなかった。しばらく行くと、数えきれないほどテントが張られている所で車は止まった。

私は、足を引きずりながら、テントを回った。幾張り目だったか、テントの中から「ゆきちゃんじゃないか」と、聞き覚えのある、なつかしい声がした。声の主を見て夢ではないかと思った。死んだとばかり思っていた、ぐすくまのおじさんだった。そのあと、そこでどのようなことがあったのか覚えていない。たぶん出血多量で危篤状態だったのではないか、と思う。元気になってから、父の友人であった徳村家に引き取られ、沖縄へ引き揚げた。徳村家では大事に育てられた。

二年後、与那原で落ちついているところへ、私が生きていることを伝え聞いた次郎叔父さんが、涙をいっぱい目にためて迎えにきた。叔父の体は、父の匂いでいっぱいだった。それから祖母たちの待つ、両親の故郷コザへと引きとられた。

戦争という種子は、肉眼で見ることのできない小さなものだが、人間の肉や骨だけでなく、心まで食い尽くして鬼とし、最も尊い生命を食って大きくなる。そして生き残った人の心と体に、大きな傷を残す。私は、両親や妹、弟の生命を、自分の手足の肉を、誕生日さえも食われてしまい、いまだにいつ生まれたのか知らない。

現住所　石垣市大川三五八
当　時　小学校　三年生

【『市民の戦時戦後体験記録第二集』（石垣市市史編　石垣市役所）所収】

渡嘉敷島の集団自決

兄と二人で母と弟と妹を死に至らせた沖縄キリスト教短大教授で牧師の金城重明さん

（体験と思索）

渡嘉敷島の集団自決は、沖縄戦で最たる残酷物語、世界戦争史上他に類を見ない惨事であった。愛するが故に互いに殺し合わなければならない、戦争の異常性によって起こった島の血縁運命共同体の末路であった。

日本軍陣地の近くに集結せしめられた我々住民は、不安と悲壮感の中で命令を待った。

いよいよ時が来た。配られた三十余個の手榴弾で自決を始めた。幸か不幸か発火した手榴弾の数は少なく、その逆に、より大きな惨事をもたらした。最も確実な方法で死の道が選ばれたのである。夫が妻を、親が子を、男子が婦女子を、こん棒や石で頭部をたたいたり、かまやかみそりで頚動脈などを切ったり、ひもで首を絞めて肉親の尊い命を絶った。悲鳴やうめき声が耳をつんざく。頭がい骨は割れ、頚部の動脈や心臓からは血が噴き出し、絞め殺され、たたき殺された遺体は累をなした。

混乱と無秩序の中にも、最も愛する者、弱い者の命から先に絶って行くといった一つの筋道、順序みたいなものがあったと思われる。愛する者を放置しておくことは、最も恐れていた敵軍による惨殺に彼等の命をゆだねることを意味したからである。肉親を置いて死におもむく男子は一人もいなかった。死の異常性の中に見られたヒューマンなもの（ゆがめられた形においてではあるが）、不条理の中の条理といえるのだろうか。

このような判断は、三十六年もたった現在の冷静な大人の見方かもしれない。集団自決が最後に近づくにつれ、生き残ることへの恐怖と不安が高まり、せっぱ詰まった危機感に襲われた。自他の命を絶つ事がますます至上命令となった。最後の生き残りと思ったわれわれ少年少女数名は、米軍への斬り込みを決意して自決場を後にした。

生き延びていた日本軍との出会いは第一の衝撃であり、他の住民との出会いは第二のショックだった。生き延びてよかったとは毛頭思えなかった。むしろ戦争の長期化による次の死に絶望的望みを託して、今しばしの時を生きるというのが、いつわらざる心境だった。しかし、そのような時は再び到来せず、生への本能的欲求が頭をもたげてきた。三百二十九人の尊い生命は犠牲になり、流された血は下の小川の水を赤く染め、その色は集団自決の残酷さを語り続けるかのように、いく日もいく日も消えなかった。

今から三十六年前、あの平和な島に何故あのような異常で残酷な集団自決が起こったのだろうか。それはいうまでもなく戦争の異常性によるものである。しかも戦争は台風一過的天災ではなく、決して償い得ない人災なのである。そして何よりも集団自決者たちを死に追いこんだ決定的要因は、われわれを狂気にし、国民を異常にした、かつての皇民化教育であった。

天皇や国家のために死ぬことは最高の栄誉であり、その半面敵に捕らえられることは最大の恥辱であるだけでなく、惨殺されるものと信じこまされていた。従って集団自決は、すべての皇国民の魂の中に潜在していた。ただそれが最も特異な形で顕在化したのが渡嘉敷島であったのである。自決命令が引き金になったのは当然であるが、軍民二つの共同体